

「御名を崇めるとは？」(2021.11.21)

「わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに全能の神として現れたが、
主というわたしの名を知らせなかった。」(出エジプト記 6:3)

先週は、「モーセを遣わす方は主」という題で説教しました。ヘブル語を持ち出して、少し学問的な話になり、辟易された方があったかもしれません。しかし、当の私は不思議にもその後、改めて「御名を崇める」という事の意味について気づかされたのです。

苦境の中にあるモーセに対して、神は上掲のみ言葉を語られました。それは事前にモーセに知らせていた「主というわたしの名」を思い起こさせるためでした。この「主」と訳された元々の原語はヘブル語で「יְהוָה (ヤハウエ)」と書き、右から英語にすると「YHWH」で、神聖四文字と言われます。一方、神はご自身を、燃える柴の間から、「わたしはある」という者だ、とモーセに啓示されました(出エジプト記 3:14)。この「私はある」は、ヘブル語で「אֲנִי אֵלֹהִים (エヒイエ)」です。なぜ固有名詞「ヤハウエ」と違うのでしょうか。実は「彼はある」という三人称単数が「הוּא אֵלֹהִים (イヒイエ)」なので、これが訛って「ヤハウエ」になったというのです。



名は体(本質・実体)を表すといえます。では「わたしはある」とはどういうことでしょうか。これは神の永遠性と遍在性を表し、いつでもどこにでも存在するということです。それはとりもなおさず、今・ここに存在するということです。ですから、モーセに向かって「わたしは主である」と啓示されたことは、「わたしはあなたと共に今・ここにいる。そして、いつでもどこにでもあなたと共にいる」ということなのです。これが主という名の意味です。信じる者にはなんと慰めと励ましに満ちた名前でしょうか！

このように説教した後で、「なぜ神はご自身の御名を明かされたのだろうか」と考えました。ピンとききました。それは、モーセも私たちも忘れるから。神がすぐそばにいて下さることを忘れるからではないでしょうか。だから、主よ、と私たちが御名を呼ぶ時、すでに「私と共に今ここにおられる方よ」と呼び掛けていることに気づき、思い起こしたい。そして、御名の本質・実体がどんな時も変わることなく「今ここにいて下さり、いつでもどこにでも共にいて下さる」ゆえに、賛美と感謝を捧げ、御名を崇めたいと思う。